
さいたま市

下野田稻荷原遺跡Ⅱ

一般国道463号浦和インターチェンジ連結部建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

2013

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は、県民生活の利便性を向上させ、産業振興をより一層促進させることを目指し、次世代に引き継ぐべき県民共有の財産として、道路などの社会基盤の必要な整備を行っています。

さいたま市緑区大字下野田地内に計画された、一般国道463号浦和インターインターチェンジ連結部建設工事もその一環であります。同地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在し、今回発掘調査を実施した下野田稻荷原遺跡もその中の一つです。発掘調査は、浦和インターインターチェンジへのアクセス道路建設に伴う事前調査であり、埼玉県道路建設課（当時）の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代早期から後期の土器をはじめ、古墳時代前期、平安時代、中世の土壙や溝跡などが発見され、この地域で人々が長い間暮らしていたことがわかりました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、埼玉県さいたま県土整備事務所、さいたま市教育委員会並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成25年1月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 村 英 樹

例 言

1. 本書は、さいたま市緑区大字下野田に所在する下野田稻荷原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番、及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

下野田稻荷原遺跡 (SMNDINRHR)
浦和市 (現さいたま市緑区) 大字下野田字稻荷原215他
平成10年10月16日付け教文第2-125号
3. 発掘調査は、一般国道463号浦和インター チェンジ連結部建設工事に伴う埋蔵文化財記録 保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課（当時）が調整し、埼玉県道路建設課（当時）の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 発掘調査・整理報告書作成事業は I-3 に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成10年10月1日から平成10年11月30日まで、昼間孝志、中山浩彦が担当して実施した。

- 整理・報告書作成事業は、平成24年11月1日から平成24年11月30日まで、大谷徹が実施し、平成25年1月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第398集として印刷・刊行した。
5. 発掘調査における基準点測量は、中央航業株式会社に委託した。
 6. 発掘調査における写真撮影は昼間、中山が、出土遺物の写真撮影は大谷が行った。
 7. 出土品の整理・図版作成は大谷が行い、縄文土器は細田勝の協力を得た。
 8. 本書の執筆は、I-1 を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、他は大谷が行った。
 9. 本書の編集は大谷が行った。
 10. 本書にかかる諸資料は、平成25年2月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 11. 発掘調査、本書の作成にあたり、さいたま市教育委員会をはじめ関係機関の皆様から御教示、御協力を賜った。記して感謝いたします。

凡 例

1. 遺跡全体におけるX・Yの数値は、日本測地系、国土標準平面直角座標第IX系に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位は、すべて座標北を指す。

D-4 グリッド北西杭の座標は、日本測地系 X = -12500.000m, Y = -9450.000m (世界測地系 X = -12144.9226m, Y = -9743.0147m)、北緯35°53'25.74752"、東経139°43'31.48455" (世界測地系) である。
2. 調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本 (1グリッド) とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。
3. グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から

- 南方向にアルファベット、西から東方向に数字を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。
4. 本書の本文・挿図・表に記した遺構の略号は、以下のとおりである。

SK…土壤 SD…溝跡
 5. 本書における挿図の縮尺は以下のとおりである。ただし、一部例外もある。

全体図 1:250 遺構図 1:60
縄文土器 1:3 土師器・須恵器等 1:4
 6. 遺構断面図に記した水準数値は、海拔標高 (単位m) を示す。
 7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行 1/50000地形図、さいたま市都市計画図 1/2500 を編集・使用した。

目 次

序	2. 歴史的環境	3
例言	III 遺跡の概要	6
凡例	IV 遺構と遺物	9
目次	1. 繩文土器	9
	2. 土壙	9
I 発掘調査の概要	3. 溝跡	14
1. 発掘調査に至る経過	4. その他の出土遺物	15
2. 発掘調査・報告書作成の経過	V 調査のまとめ	16
3. 発掘調査・報告書作成の組織	写真図版	
II 遺跡の立地と環境		
1. 地理的環境		

挿 図 目 次

第1図 埼玉県の地形	3	第7図 土壙 (1)	10
第2図 周辺の遺跡	5	第8図 土壙 (2)	11
第3図 下野田稻荷原遺跡位置図	6	第9図 土壙出土遺物	13
第4図 基本土層	7	第10図 第1・2・3号溝跡	14
第5図 下野田稻荷原遺跡全体図	8	第11図 その他の出土遺物	15
第6図 繩文土器	9		

表 目 次

第1表 土壙出土遺物観察表	13	第2表 その他の出土遺物観察表	15
---------------	----	-----------------	----

写 真 図 版 目 次

図版1	1 A区全景 (北から)	3 第18~23号土壙
	2 B区全景 (北から)	4 第18号土壙
	3 基本土層 (B区TP2)	5 第20号土壙
	4 第1号土壙	6 第21・22・23号土壙
	5 第2号土壙	7 第24号土壙
	6 第9号土壙	8 第1・2・3号溝跡
	7 第10号土壙	図版3 1 繩文土器 (第6図1~13)
	8 第11号土壙	2 土壙出土遺物 (第9図1~9)
図版2	1 第16号土壙	3 その他の出土遺物 (第11図1~10)
	2 第17号土壙	

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

埼玉県では、埼玉の成長を支える社会基盤を作るための重要施策のうち、埼玉の活力を高める道路整備の一環として、インターチェンジへのアクセス道路などの幹線道路の整備を進めている。こうした整備は生活の利便性を向上させ、より一層の産業振興を図るために必要なものと位置付けられている。

その一方で、さいたま市を中心とした地域に、高次都市機能の集積を図り、全国的、国際的な都市活動の拠点とするための道路整備を行っている。一般国道463号はこうした施策の一環として計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

一般国道463号浦和インターチェンジ連結部に係る埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、平成10年2月17日付け道建第451号で、道路建設課長（当時）より文化財保護課長（当時）あてに照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、その結果をもとに、平成10年6月17日付け教文第373号で、下野田稻荷原遺跡の取扱いについて次のように回答した。

1 埋蔵文化財の所在

名称	種別	時代	所在地
下野田稻荷原遺跡 (01-076)	集落跡	縄文 古墳	浦和市（現さいたま市 緑区）大門字東裏

2 取扱い

上記の埋蔵文化財包蔵地は現状保存することが望ましいが、事業計画上やむを得ず現状を変更する場合は事前に文化財保護法第57条の3の規定に基づく文化庁長官あての発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（当時）と道路建設課、文化財保護課の三者により調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、平成10年10月1日から平成10年11月30日までの期間で、実施することになった。

文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、第57条の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され発掘調査が実施された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

平成10年10月16日付け 教文第2-125号

（生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

下野田稻荷原遺跡の発掘調査は、平成10年10月1日から平成10年11月30日まで実施した。調査面積は、1,310m²である。

調査地点は山林の斜面地にあり、下段の平坦地と上段の平坦地との間に急勾配をもつため、便宜上、調査区の上段をA区、下段をB区と呼称し、調査にあたった。

10月上旬、安全対策のため調査区に囲柵を設置し、重機による表土掘削を行った。その後、補助員による遺構の確認作業に着手し、併せて基準点測量を業者に委託して基準杭を打設した。

10月中旬から11月中旬にかけて、概ねB区からA区の順番で、検出した土壌、溝跡などの遺構の精査を行い、順次、土層断面図・平面図などを作成し、写真撮影を行った。また、調査区内にテストピットを数箇所設定し、旧石器時代の調査を並行して行った。

11月下旬までに、発掘・記録作業を終了し、調査区の埋戻しを行い、11月30日にすべての作業を終了した。

(2) 整理報告書作成

整理報告書の作成作業は、平成24年11月1日から平成24年11月30日まで実施した。

11月上旬に出土遺物の水洗・注記を行った。その後、土器の接合・復元作業を行い、実測遺物を抽出した。

11月中旬にかけて土器破片の拓本・断面実測、機械・手測りによる実測作業を行った。実測の終了した遺物は、順次トレースし、遺物図版の版組を行った。

遺構図の作成は、遺物の作業と並行して行った。図面整理と修正を経て第二原図を作成した。第二原図をスキャナーでコンピューターに取り込み、画像ソフトを用いてトレースし、土層説明等のデータを加えて編集作業を行い、遺構図版の版下を作成した。

11月中旬から遺構・遺物図版の割り付け、遺物の写真撮影と写真図版の作成を行うとともに、原稿執筆と編集作業を行った。11月末に原稿を印刷業者に入稿し、3回の校正を経て、平成25年1月25日に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成10年度（発掘調査）

理 事 長	荒 井 桂
常務理事兼管理部長	鈴 木 進
管理部	
専門調査員兼経理課長	関 野 栄 一
庶 務 課 長	金 子 隆

調査部	
調 査 部 長	谷 井 彪
調 査 部 副 部 長	水 村 孝 行
調 査 第 四 課 長	鈴 木 秀 雄
統 括 調 査 員	昼 間 孝 志
調 査 員	中 山 浩 彦

平成24年度（報告書作成）

理 事 長	中 村 英 樹
常務理事兼総務部長	根 本 勝
総務部	
総務部副部長	富 田 和 夫
総 務 課 長	矢 島 将 和

調査部	
調 査 部 長	昼 間 孝 志
調 査 部 副 部 長	劍 持 和 夫
調査監兼整理第一課長	細 田 勝
主	大 谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

下野田稻荷原遺跡の所在するさいたま市は、埼玉県の南東部に位置する。地形的には、主に大宮台地と呼ばれる洪積台地と、見沼低地、荒川低地と呼ばれる沖積低地からなっている。

大宮台地は、埼玉県鴻巣市（旧吹上町）からさいたま市までの、長さ約30kmにわたって延びる細長い台地で、綾瀬川や芝川といった中小河川によって細かく開析され、国内でもめずらしい樹枝

2. 歷史的環境

ここでは、下野田稻荷原遺跡の周辺の遺跡について概観したい。

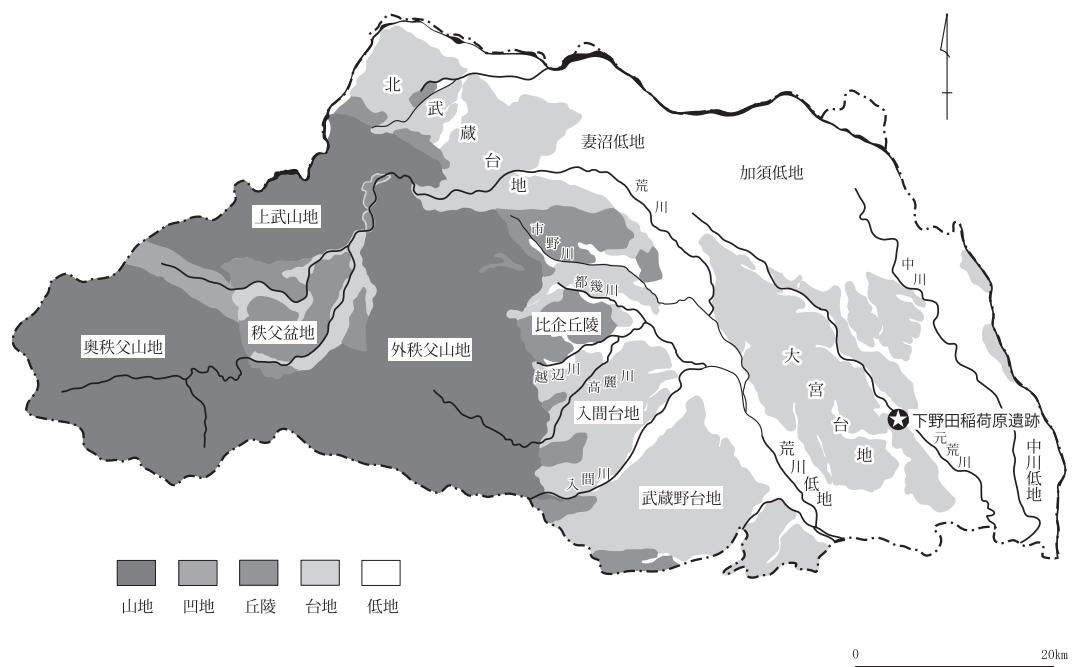
さいたま市内で、はじめて旧石器時代の遺跡が発見されたのは、昭和49年の大古里遺跡第1次調査であった。その後、明花向遺跡では遺物集中地点4箇所が検出されたのをはじめ、現在のところ、さいたま市内では最古と見られる約3万年前の剥片が出土している。和田北遺跡では、昭和55年の調査時に黒曜石製の国府型ナイフ形石器が出

状の地形を形成している。下野田稻荷原遺跡は、このような細分された台地のうち、東側に位置する鳩ヶ谷支台の東縁部に立地している。鳩ヶ谷支台は、綾瀬川と芝川に挟まれた南北に細長く延びる台地で、遺跡の東側には綾瀬川の形成した沖積低地が広がり、西側には綾瀬川から湾入してきた溺れ谷が台地奥まで入り込んでいる。標高は約11～16mで、沖積低地との比高差は約11mである。

土し、注目を集めた。この他にも北宿西遺跡、松木遺跡、井沼方遺跡、不動谷遺跡など、数多くの遺跡が調査されている。

縄文時代になると、大宮台地上にも数多くの遺跡が知られるようになる。草創期の出土例は少ないものの、えんぎ山遺跡では隆線文系土器、爪形文系土器、多縄文系土器などが出土した。

早期の遺跡は、規模や数が飛躍的に増加する。大古里遺跡はその代表的な遺跡である。既に20回



第1図 埼玉県の地形

近くの調査が行われ、撲糸文系土器、沈線文系土器、条痕文系土器を出土する100基以上の炉穴群と2軒の住居跡が確認されている。また、北宿西遺跡、明花向遺跡では、スタンプ状石器と呼ばれる食物加工用の石器が出土している。この他にも松木遺跡、井沼方遺跡、梅所遺跡、芝原遺跡、和田北遺跡、東裏西遺跡などがある。

前期には海進がピークを迎え、大宮台地の縁辺部を中心に、数多くの貝塚や集落が形成されるようになる。貝塚では原山貝塚、太田窪貝塚、八雲貝塚、集落跡では井沼方遺跡、会ノ谷遺跡、松木遺跡、大古里遺跡、北宿遺跡などがある。

前期の中頃から末葉には、気候の寒冷化や海退に伴い、遺跡は規模、数ともに減少傾向にあるが、中期中頃を境にして、徐々に増加する。当該期、この地域で特筆すべき遺跡として、馬場小室山遺跡が挙げられる。縄文時代中期の集落や、後期から晩期の遺構などが多数確認されている。特に、昭和57年の調査で検出された第51号土壙では、人面付土器をはじめ土偶装飾付の土器や土偶、土版、独鉛石などさまざまな遺物が出土した。また近年、大規模な環状盛土遺構が調査され、注目されている。この他にも原山坊ノ在家遺跡、駒形北遺跡、会ノ谷遺跡などが知られる。

その後、周辺では弥生時代前期までの遺物を出土する遺跡はほとんど見られなくなるが、中期になると、台地縁辺部を中心に遺跡の所在が確認されるようになる。上野田西台遺跡では16軒の住居跡が発見され、優品の抉入磨製石斧や鉄製鉈が出土した。明花向遺跡では、方形周溝墓や集落を囲む環濠が確認されている。下野田稻荷原遺跡の北側に隣接する下野田本村遺跡では、第5次調査で中期の住居跡8軒と環濠が確認されている。この他にも東裏遺跡、松木遺跡、大北遺跡、釣上高岡東遺跡などがある。

後期になると、遺跡の数は急激に増加する。立地は、中期に引き続き台地の縁辺部が中心であ

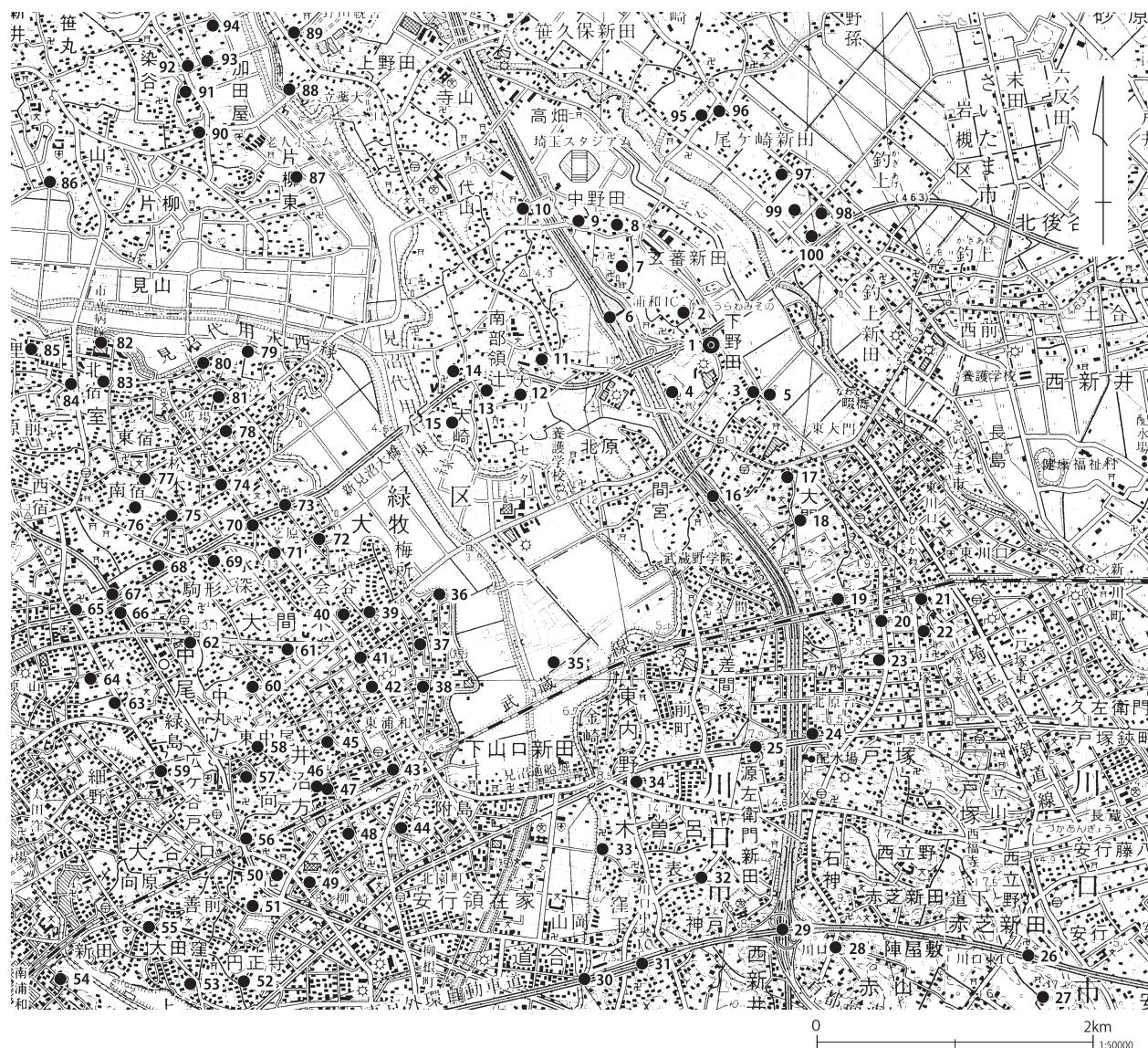
る。鳩ヶ谷支台では、下野田本村遺跡、東裏西遺跡、上野田西台遺跡、谷ノ前遺跡などが調査されている。また、芝川右岸の浦和支台東縁部には、鉄剣やガラス玉を副葬した方形周溝墓群を伴う、県内でも最大規模の環濠集落である井沼方遺跡、120軒を超える住居跡が検出された環濠集落の馬場北遺跡のほか、北宿遺跡、芝原遺跡、宮前遺跡、梅所南遺跡が知られる。

同様に、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の遺跡も数多く確認されている。下野田稻荷原遺跡をはじめ、周辺には下野田本村遺跡、東裏遺跡、東裏西遺跡、谷ノ前遺跡、上野田西台遺跡、大崎北久保遺跡などが所在する。

古墳時代になると、大宮台地周辺の遺跡の分布に大きな変化が現れる。古墳時代前期の遺跡は、これまでのように台地縁辺部に営まれる一方で、さいたま市南西部の荒川に沿った自然堤防上に数多く分布するようになる。このことは、古墳時代に生産形態の変化などにより、生活域が台地上から低地へと移動したことを物語っている。

これに対し、古墳時代中期には遺跡数が大幅に減少し、規模も縮小化傾向を示す。周辺では、鳩ヶ谷支台の中野田堀ノ内遺跡、中野田島ノ前遺跡、芝川流域の御蔵山中遺跡、御蔵台遺跡が見られるにすぎない。古墳時代後期にもその傾向は続々、周辺では馬場東遺跡、北宿遺跡、低地部の釣上新田上遺跡など、少数の遺跡に限られてしまう。

奈良・平安時代には、再び台地上に集落が営まれるようになる。下野田本村遺跡、東裏遺跡などでも下野田稻荷原遺跡同様、口クロ土師器が出土している。さらに、和田北遺跡では口クロ土師器を生産した土師器焼成坑が検出されている。他に大間木内谷遺跡、駒前遺跡、駒前南遺跡、柄谷遺跡、行谷遺跡、北宿遺跡、宮前遺跡、松木遺跡などが知られ、8世紀後半から9世紀にかけて、台地上には小規模な集落が散在する様相が窺われる。



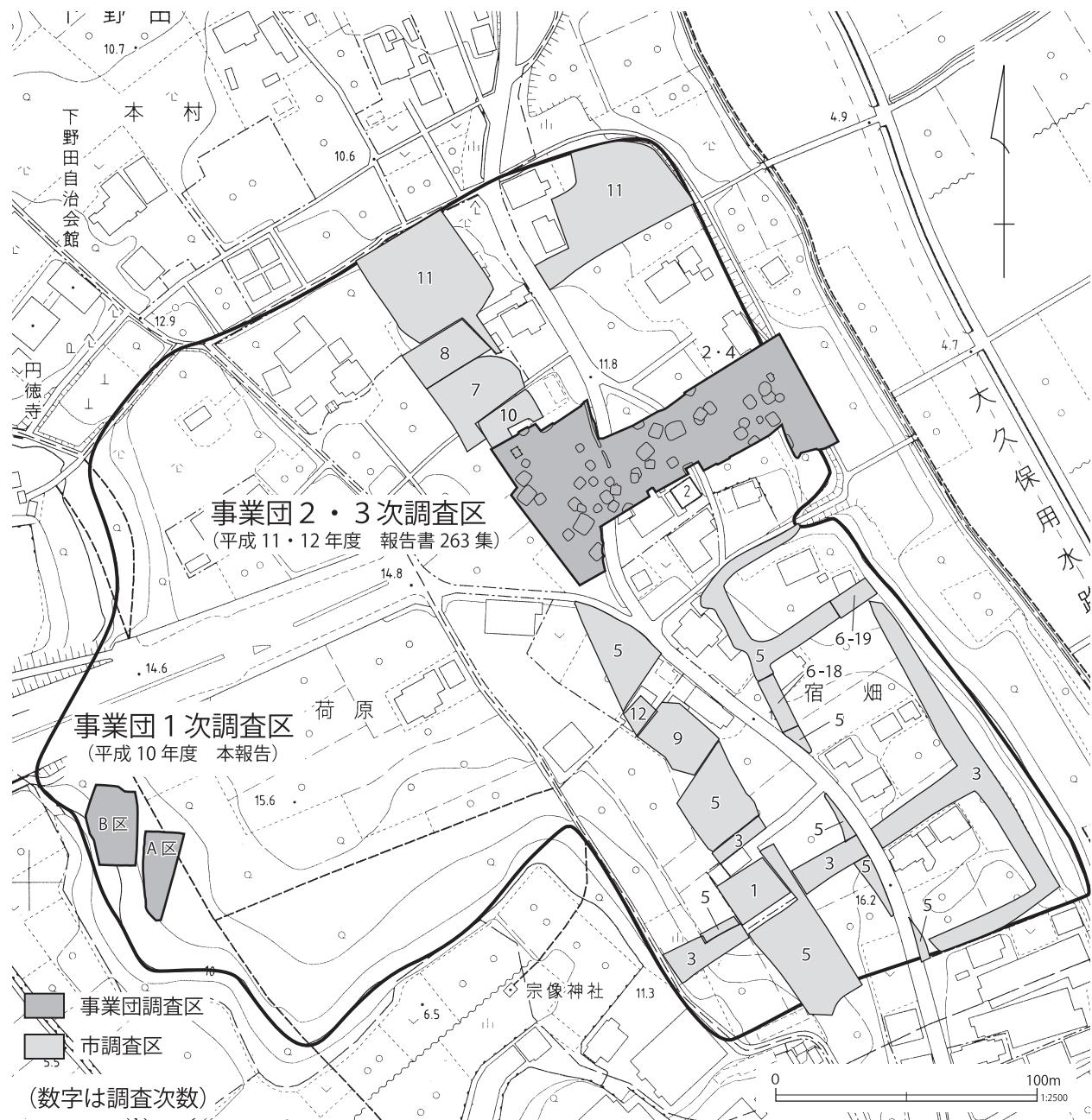
- | | | | | |
|-------------|------------|----------------|-------------|---------------|
| 1 下野田稻荷原遺跡 | 21 一本木遺跡 | 41 和田西遺跡 | 61 大間木内谷遺跡 | 81 馬場小室山遺跡 |
| 2 下野田本村遺跡 | 22 戸塚上台遺跡 | 42 西谷遺跡 | 62 駒形南遺跡 | 82 北宿遺跡 |
| 3 東裏遺跡 | 23 上台遺跡群 | 43 宮前遺跡 | 63 不動谷南遺跡 | 83 北宿南遺跡 |
| 4 東裏西遺跡 | 24 野伝場遺跡 | 44 川口市No.136遺跡 | 64 原山坊ノ在家遺跡 | 84 北宿西遺跡 |
| 5 大門貝塚 | 25 東野遺跡 | 45 大北遺跡 | 65 不動谷遺跡 | 85 大古里遺跡 |
| 6 鶴巻遺跡 | 26 猿貝北遺跡 | 46 井沼方馬堤遺跡 | 66 駒前南遺跡 | 86 篠山遺跡 |
| 7 中野田島ノ前遺跡 | 27 猿貝貝塚 | 47 井沼方遺跡 | 67 駒前遺跡 | 87 大宮市A-3遺跡 |
| 8 中野田堀ノ内遺跡 | 28 石神貝塚 | 48 井沼方南遺跡 | 68 駒形北遺跡 | 88 上野田西台遺跡 |
| 9 中野田中原遺跡 | 29 卜伝遺跡 | 49 明花向遺跡 | 69 駒形遺跡 | 89 上野田膝子遺跡 |
| 10 谷ノ前遺跡 | 30 道合久保前遺跡 | 50 明花東遺跡 | 70 水深北遺跡 | 90 原山貝塚 |
| 11 玄蕃新田本田遺跡 | 31 八木本遺跡 | 51 明花南遺跡 | 71 水深遺跡 | 91 八雲貝塚 |
| 12 えんぎ山遺跡 | 32 叱原遺跡 | 52 円正寺遺跡 | 72 梅所遺跡 | 92 大宮市A-21遺跡 |
| 13 大崎棚井前遺跡 | 33 木曾呂表遺跡 | 53 太田窪貝塚 | 73 芝原遺跡 | 93 大宮市A-178遺跡 |
| 14 大崎北久保遺跡 | 34 木曾呂北遺跡 | 54 小松原高校遺跡 | 74 松木遺跡 | 94 大宮市A-20遺跡 |
| 15 大崎東新井遺跡 | 35 四本竹遺跡 | 55 善前南遺跡 | 75 南宿南遺跡 | 95 尾ヶ崎新田深町西遺跡 |
| 16 西裏遺跡 | 36 和田北遺跡 | 56 明花遺跡 | 76 南宿北遺跡 | 96 尾ヶ崎新田深町遺跡 |
| 17 行谷遺跡 | 37 和田南遺跡 | 57 とうのこし遺跡 | 77 三室遺跡 | 97 釣上高岡東遺跡 |
| 18 桜谷遺跡 | 38 吉場遺跡 | 58 東中尾遺跡 | 78 松本北遺跡 | 98 釣上高岡南遺跡 |
| 19 南方遺跡 | 39 梅所南遺跡 | 59 広ヶ谷戸稻荷越遺跡 | 79 馬場東遺跡 | 99 釣上碇遺跡 |
| 20 南方西台遺跡 | 40 会ノ谷遺跡 | 60 中尾中丸遺跡 | 80 馬場北遺跡 | 100 釣上新田上遺跡 |

第2図 周辺の遺跡

III 遺跡の概要

下野田稻荷原遺跡は、埼玉高速鉄道浦和美園駅の南西0.3km、JR 武蔵野線東川口駅北西3.6kmに位置し、標高11～16mの大宮台地鳩ヶ谷支台の東縁部に立地する。鳩ヶ谷支台は、西の見沼低地と東の綾瀬川に挟まれた南北に細長い台地で、両低地から樹枝状に谷が入り込んだ複雑な地形となっている。

平成2年の浦和市教育委員会による第1次調査を端緒に、当事業団が平成10～12年度に一般国道463号の建設に伴って調査（事業団第1～3次）を行っているほか、土地区画整理事業に伴い、浦和市遺跡調査会、さいたま市遺跡調査会によって現在まで調査が継続的に行われている。これまでの調査成果により、弥生時代後期から古墳時代前



第3図 下野田稻荷原遺跡位置図

期と奈良・平安時代を中心とした集落跡であることが明らかになっている。

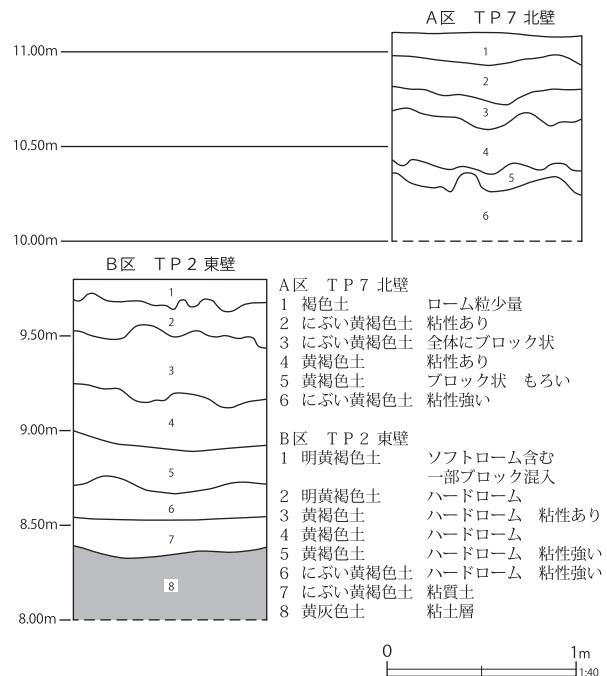
今回の調査地点は山林の斜面地に位置し、下段の平坦地と上段の平坦地との間に急勾配をもつため、便宜上、調査区の上段をA区、下段をB区と呼称した。A・B両区とも大きく搅乱を受けており、遺構の残存状態はあまり良好でなかった。検出された遺構は、A・B区を合わせ土壙24基、溝跡3条である。

A区は標高10~12mで、北側から南側に向かって傾斜し、南端付近は急傾斜をなしている。遺構は、調査区南端の斜面地に7基の土壙が検出された。平面形態は楕円形が主体である。出土遺物から、第20号土壙は古墳時代前期、第21・22号土壙は中世に位置付けられる。

B区は標高8~10mでA区の北西側に位置し、東側から西側に向かって傾斜する。検出された遺構は土壙17基、溝跡3条である。土壙は平坦面を中心で分布する。平面形態は円形ないし楕円形が多い。第4・12・14号土壙は古墳時代前期、第5~7・11・16・17号土壙は平安時代、第9号土壙は中世と考えられる。

下野田稻荷原遺跡に関する報告書（第3図の数字は調査次数に対応する）

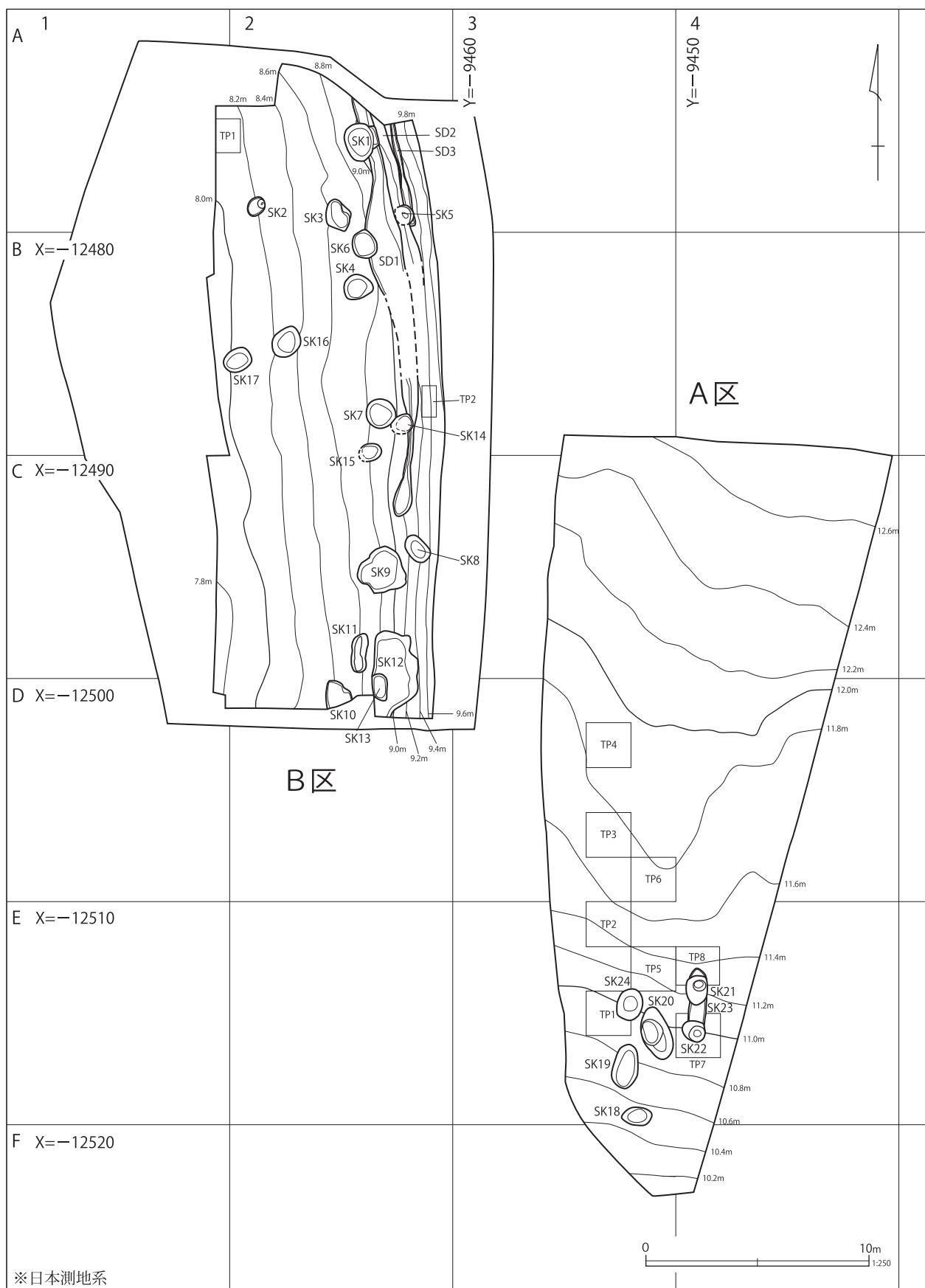
- 中村誠二 1991『大古里遺跡（第9・10・11・12地点）稻荷原遺跡』浦和市内遺跡発掘調査報告書第15集 浦和市教育委員会
 星間孝志 2001『下野田稻荷原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第263集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 山田尚久 2000『東裏西遺跡（第2次）・東裏遺跡（第4次）・下野田稻荷原遺跡（第3次）・大門西裏南遺跡（第2次）』発掘調査報告書 浦和市遺跡調査会報告書第277集 浦和市遺跡調査会
 山田尚久 2001『下野田稻荷原遺跡（第5次）・東裏遺跡（第5次）・大門西裏南遺跡（第3次）』発掘調査報告書 浦和市遺跡調査会第295集 浦和市遺跡調査会
 山田尚久 2004『下野田稻荷原遺跡（第6次）・東裏西遺跡（第3次）』さいたま市遺跡調査会報告書第26集 さいたま市遺跡調査会
 山田尚久 2007『下野田稻荷原遺跡（第7次・第8次）・下野田本村遺跡（第3次）』さいたま市遺跡調査会報告書第57集 さいたま市遺跡調査会
 山田尚久 2008『下野田稻荷原遺跡（第9次）』さいたま市遺跡調査会報告書第67集 さいたま市遺跡調査会
 山田尚久 2010『下野田稻荷原遺跡（第10次）・下野田本村遺跡（第4~6次）・中野田堀ノ内遺跡（第1次）』さいたま市遺跡調査会報告書第107集 さいたま市遺跡調査会
 山田尚久 2011『中野田堀ノ内遺跡（第2・3次）・下野田稻荷原遺跡（第11次）・下野田本村遺跡（第7次）』さいたま市遺跡調査会報告書第115集 さいたま市遺跡調査会
 山田尚久 2011『東裏遺跡（第10次）・下野田稻荷原遺跡（第12次）』さいたま市遺跡調査会報告書第114集 さいたま市遺跡調査会



第4図 基本土層

溝跡は、調査区東側のやや傾斜の強い斜面地に検出された。土層の観察から第2号溝跡が最も古く、それを壊して第1・3号溝跡が開削されていることが明らかになった。時期は明確でないが、立地状況から推して区画溝か根切り溝であろう。

なお、遺構は検出されなかつたが、縄文時代早期から後期の土器片が少量出土した。



第5図 下野田稻荷原遺跡全体図

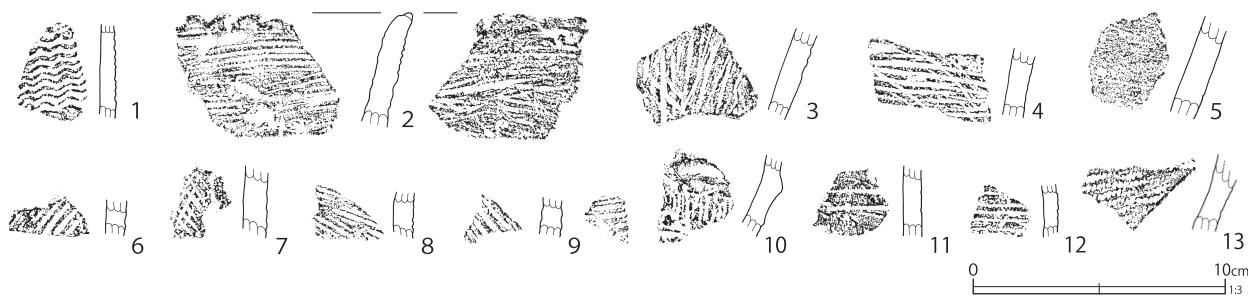
IV 遺構と遺物

1. 繩文土器

調査区からは縄文時代の遺構は検出されていないが、土壌などの覆土中に混入した状態で、早期から後期の土器が出土した。

第6図1は早期前葉の押型文系土器で、器面に山形押型文を施文する。2～9は早期後葉の条痕文系土器である。内外面に貝殻による条痕整形、

もしくは擦痕整形を施す。2は内削ぎ状の口唇部に刻目を施す。10は中期中葉の勝坂式土器である。器面に隆帯を貼付し、下側に幅広の爪形文を施す。11～13は後期と考えられる土器である。11・12は浅い条線が施されている。13は地文に単節LRの縄文を施文する。



第6図 縄文土器

2. 土壌

土壌は、A区7基、B区17基の計24基が検出された。

第1号土壌（第7図）

B区北東端、A-2グリッドから検出された。第1・2号溝跡を壊して構築されていた。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.68m、短軸1.46m、深さ0.80mで、主軸方位はN-9°-Wを指す。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

第2号土壌（第7図）

B区北側西寄り、A-2グリッドから検出された。平面形態は橢円形で、底面にピットをもつ。規模は長軸0.90m、短軸0.71m、深さ0.65mで、主軸方位はN-41°-Eを指す。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

第3号土壌（第7図）

B区北側、A-2グリッドから検出された。平面形態は不整形である。規模は長軸1.50m、短軸

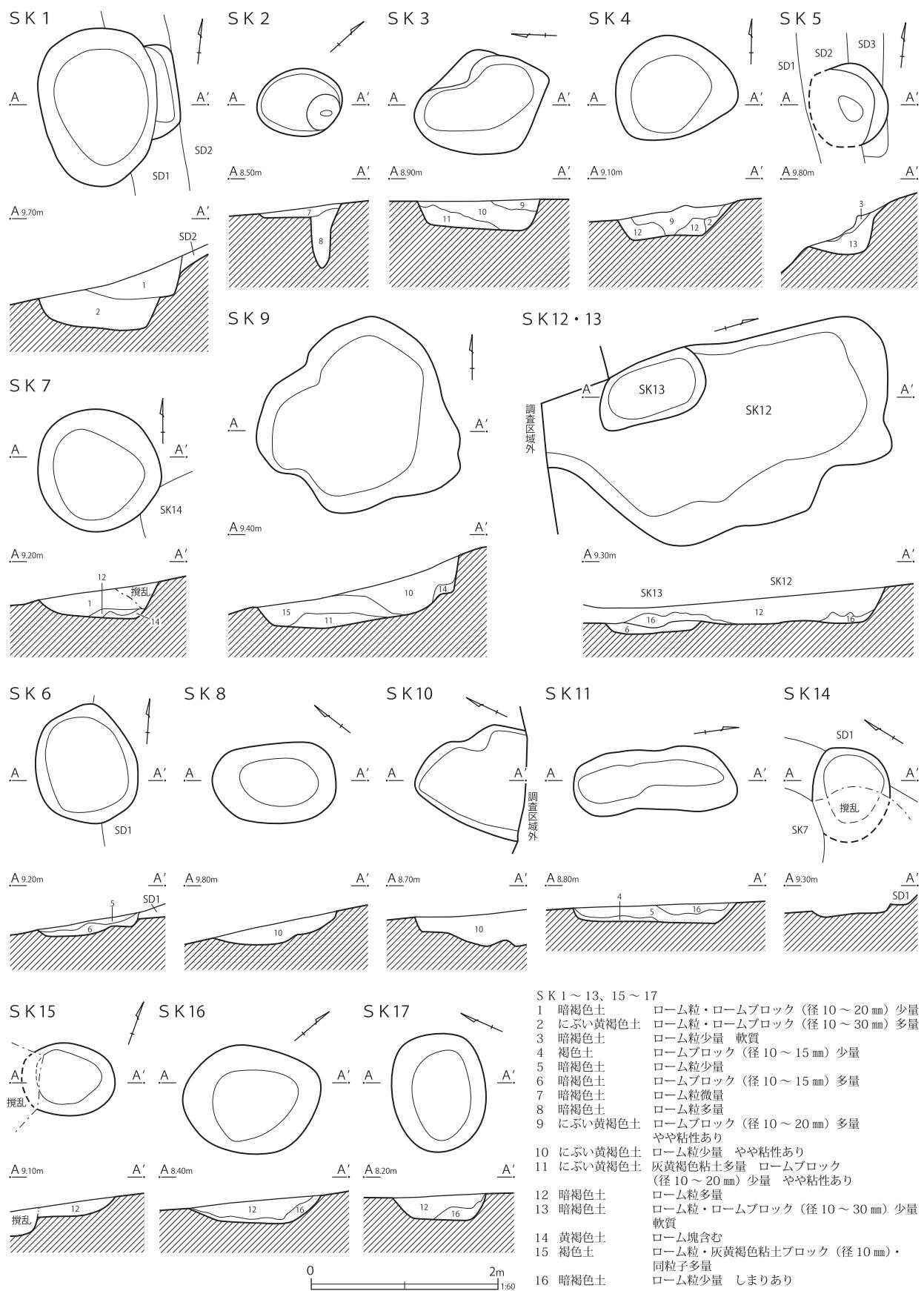
1.15m、深さ0.31mで、主軸方位はN-19°-Wを指す。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

第4号土壌（第7図）

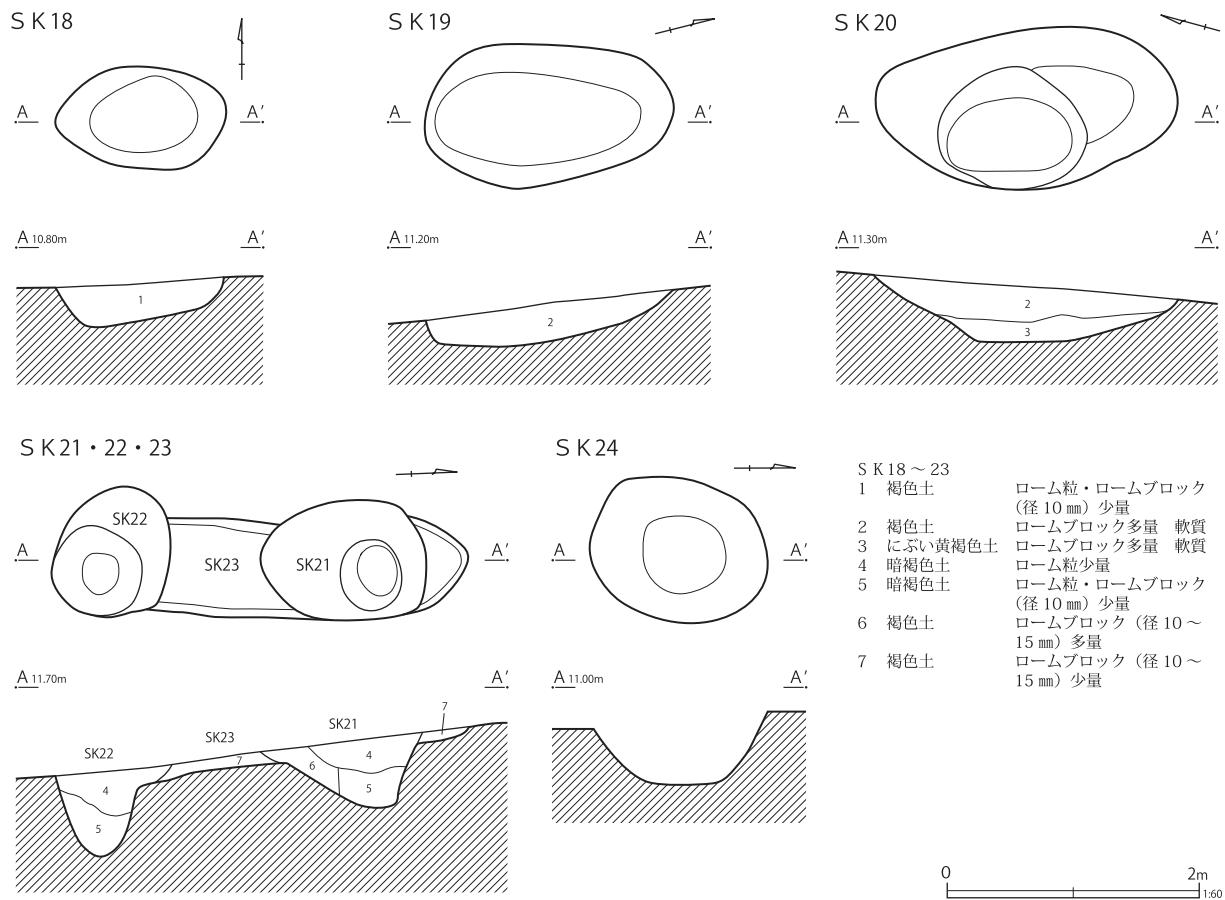
B区中央や北寄り、B-2グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.30m、短軸1.10m、深さ0.32mで、主軸方位はN-84°-Wを指す。覆土中より土師器甕の破片が出土した（第9図1）。時期は古墳時代前期と考えられる。

第5号土壌（第7図）

B区北側東寄り、A-2グリッドから検出された。第2・3号溝跡によって壊されていた。平面形態は円形と推定される。規模は残存範囲で長軸0.88m、短軸0.80m、深さ0.50mで、主軸方位はN-27°-Wを指す。覆土中よりロクロ土師器壺の口縁部片が出土した（第9図2）。時期は平安時代と考えられる。



第7図 土壌 (1)



第8図 土壌 (2)

第6号土壌 (第7図)

B区中央やや北寄り、B-2グリッドから検出された。第1号溝跡を壊して構築されていた。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.27m、短軸1.05m、深さ0.25mで、主軸方位はN-11°-Wを指す。覆土中より須恵器坏の破片が出土した(第9図3)。胎土中に白色針状物質を含むことから南比企産の製品であろう。時期は平安時代と考えられる。

第7号土壌 (第7図)

B区中央東寄り、B-2グリッドから検出された。平面形態は円形である。規模は径1.30m、深さ0.32mである。覆土中よりロクロ土師器坏の底部片が出土した(第9図4)。時期は平安時代と考えられる。

第8号土壌 (第7図)

B区南側東寄り、C-2グリッドから検出され

た。平面形態は楕円形である。規模は長軸1.32m、短軸0.84m、深さ0.38mで、主軸方位はN-37°-Wを指す。覆土中より土師器甕の破片が出土したが、時期は不明である。

第9号土壌 (第7図)

B区南側東寄り、C-2グリッドから検出された。平面形態は不整形である。規模は長軸2.15m、短軸2.01m、深さ0.77mで、主軸方位はN-90°-Eを指す。覆土中より陶器甕の破片が出土した(第9図5)。時期は中世と考えられる。

第10号土壌 (第7図)

B区南端中央、D-2グリッドから検出された。南側は調査区域外にかかる。平面形態は不明である。規模は検出範囲で長軸1.20m、短軸1.18m、深さ0.38mで、主軸方位はN-25°-Wを指す。覆土中より須恵器坏の破片が出土したが、時期は不明である。

第11号土壙（第7図）

B区南側東寄り、C-2グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.64m、短軸0.63m、深さ0.20m、主軸方位はN-11°-Eを指す。覆土中より須恵器甕が出土した（第9図6）。口縁部片で、外面に鋭利な刃先をもつ工具（刀子か）によって描かれた2条線のヘラ記号が見られる。また破断面を二次的に加工し、砥石に転用していた。時期は平安時代と考えられる。

第12号土壙（第7図）

B区南東端、C・D-2グリッドから検出された。南側は調査区域外にかかり、第13号土壙を壊す。平面形態は不整形である。規模は長軸3.75m、短軸1.98m、深さ0.35mで、主軸方位はN-6°-Eを指す。覆土中より土師器赤彩壺、甕が出土しており、時期は古墳時代前期と考えられる。

第13号土壙（第7図）

B区南東端、D-2グリッドから検出された。第12号土壙に壊されていた。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.18m、短軸0.65m、深さ0.14mで、主軸方位はN-3°-Wを指す。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

第14号土壙（第7図）

B区中央東寄り、B-2グリッドから検出された。西側を搅乱によって壊されていた。第1号溝跡と重複し、第7号土壙と接する。平面形態は橢円形と推定される。規模は残存範囲で長軸0.85m、短軸0.50m、深さ0.10mで、主軸方位はN-35°-Wを指す。覆土中より土師器甕が出土した（第9図7）。時期は古墳時代前期と考えられる。

第15号土壙（第7図）

B区中央東寄り、B・C-2グリッドから検出された。西側を搅乱によって壊されていた。平面形態は橢円形と推定される。規模は残存範囲で長軸0.82m、短軸0.77m、深さ0.22mで、主軸方位はN-67°-Eを指す。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

第16号土壙（第7図）

B区中央西寄り、B-2グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.47m、短軸1.15m、深さ0.25mで、主軸方位はN-34°-Eを指す。覆土中より須恵器甕、壺の破片が出土した。時期は平安時代と考えられる。

第17号土壙（第7図）

B区中央西寄り、B-2グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.25m、短軸1.00m、深さ0.26mで、主軸方位はN-54°-Eを指す。覆土中より須恵器壺（第9図8）、甕が出土し、条痕文系土器が混入していた。時期は平安時代と考えられる。

第18号土壙（第8図）

A区南端、E-3グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.35m、短軸0.80m、深さ0.30mで、主軸方位はN-89°-Eを指す。遺物がまったく出土していないため、時期は不明である。

第19号土壙（第8図）

A区南端、E-3グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.95m、短軸1.15m、深さ0.30mで、主軸方位はN-14°-Eを指す。覆土中より拳大の焼礫が出土しただけで、時期は不明である。

第20号土壙（第8図）

A区南端、E-3グリッドから検出された。平面形態は橢円形である。規模は長軸2.40m、短軸1.25m、深さ0.45mで、主軸方位はN-15°-Wを指す。覆土中より土師器赤彩壺の小片が出土した。時期は古墳時代前期と考えられる。

第21号土壙（第8図）

A区南端、E-4グリッドから検出された。第23号土壙を壊す。平面形態は橢円形である。規模は長軸1.30m、短軸0.90m、深さ0.55mで、主軸方位はN-2°-Eを指す。覆土中より常滑産の甕胴部片が出土した。時期は中世と考えられる。